

## 『中華若木詩抄』寸見

## ——編纂意図について——

朝 倉 尚

『中華若木詩抄』は、建仁寺の僧であった如月寿印が中華と本朝の詩人の七言絶句詩二六一篇を交互に配し、注釈を施したものである。本稿では、『中華若木詩抄』の編纂意図について、主として収められている詩の内容に焦点を合わせ、検討を加えてみたい。底本には、寛永十年版の複製である『中華若木詩抄』（勉誠社。昭45）を用いる。上、中、下巻に収められる詩には、それぞれ私に番号を施した（上巻には上1より上82までの八二首、中巻には中1より中83までの八三首、下巻には下1より下96までの九六首が収められる。）。

## (I) 童蒙の啓蒙

『中華若木詩抄』には、序文や跋文が付されていない。禅僧の作品集では、公的性格を持たせようとすればするほど、序文や跋文が付される傾向にある。それらを欠くことは、『中華若木詩抄』がかなり私的性格の濃い作品集であることを示している。

『中華若木詩抄』も、やはり童蒙に対する啓蒙を意図した書であると考えられる。時代が降れば降るほど、文筆の業に従事しなくてはならない年齢層が低下する傾向にあった。師僧の代作ばかりでは用は済まない。そこで、禅林に入る

やいなや、むしろ本格的な坐禪の修行を二の次にして、文筆習得のための教育が開始される。当初の入門書・教科書として利用されるのは、『三体詩』や『古文真宝』であり、ついで、中国の詩人の中で代表的な杜甫、李白、蘇軾、黃庭堅等の作品も学んでいる。詩の解釈法や製作法を会得するためばかりでなく、暗誦や習字のための教材でもあった。一方、これらの入門書・教科書が定着すればするほど、特に繰り返し教える師僧の中には、飽き足らないものを感じる者も生じたであろう。『新編集』『新選集』、さらにはその要約版としての『錦繡段』『続錦繡段』等が編纂される。『中華若木詩抄』も、基本的にはその延長線上に位置すると考える。『錦繡段(抄)』や『続錦繡段(抄)』に倣って収集、注釈されたものではあるまいか。

『中華若木詩抄』に取り上げられる詩の総数は二六一篇である。『両朝三百首』(京都大蔵本)や『和漢三百首』(建仁寺阿闍梨院蔵本)の書名を冠するものも存する。体裁を整えた本としては、三〇〇篇(絶海と明太祖の唱和を独立させる時は三〇一篇)を取り上げるのが望ましかった。にもかかわらず、二六一篇に止まったのは、「未完の未精撰のものである」(底本所収の中田祝夫氏解説参照)とも考えられるが、あるいは編者の無頓着のためではないかとも考える。編者としては、公的な性格を有した書を作ろうとする意欲は稀薄であり、親近の童蒙に対して、従前のものとは趣きを異にしたものを与えようとして、試みに編纂したものである。私的性格の濃いもので、取りあげる詩数には拘泥しなかったのではあるまいか。

童蒙に対する啓蒙を意図した書であったことは、抄の内容、抄者の注釈の態度からも窺うことができる。抄者の注釈の態度は、次のような教訓的な言辞によく現れている。(注釈の引用に際しては、就点を私に施した。また、通行の字体に改めることがある。)

此詩ハ未達ノ時ハ不可学也、作意太妙也、

稽古ノ人ハ此格無用也、作意ハ尤可学之、

其上ヘ大才ノ人ナレハ子細アルヘシ、後輩ハ用捨可然乎、

「未達」の人や「稽古ノ人」や「後輩」に対して教導する言辞である。このほか、例えば次のような言辞がみられる。

(中27「春園桔槔」詩項)

(中55「寄故人」詩項)

(下54「落葉」詩項)

古人ノ詩ニアルト云テ聊ルニ用マイコトゾ、悪クスレバウノマ子ノ鴉ト云タヤウナゾ、

(上8「謫仙觀瀑図」詩項)

一偏ニハ見ルヘカラス、

(中53「花埋苔」詩項)

容易ニ字ヲ下タスベカラス、

(中79「淵明濯足図」詩項)

初心者、後学者に対する言辭である。ただし、「童蒙」としたが、まったくの初心者を対象にしたものではないことは、

淵明カコトハ兒童走卒ニ至ルマテモ耳熟シタルコトナレバ不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>記之、  
によつても知られよう。

(中79「淵明濯足図」詩項)

## (Ⅰ) 題辭・素材に関わる特徴——実用性の重視

『中華若木詩抄』の編纂意図は、「童蒙の啓蒙」にあったのではないかとした。その目的を達成するために、編者は特別の配慮を払っている。中華の詩人のみならず、本朝の詩人・禅僧の作品を加えているのもそれである。中華と本朝の詩人の詩を交互に配して一書を構成することは、それまでに認められない新しい試みである。

『錦繡段』や『統錦繡段』が、主として題辭や素材に注目して分類して詩を収めるのに対して、『中華若木詩抄』にはその形跡が認められない。『錦繡段』と『統錦繡段』の分類部門は、順序に異同が存するが、大略一致している。

『中華若木詩抄』の編者が、部門に分類して配列していないことは、題辭や素材によって分類していないことを意味し、編者に童蒙を系統的に啓蒙するという意志が稀薄であったことを示しているように解されるかもしれない。が、これは『中華若木詩抄』が形式にとられない私的性情の濃い書であることを示すもので、系統的ではないが、題辭や素材に留意して集詩、注釈されている。好意的に評価すれば、『中華若木詩抄』は、「実用」に即した指導書であることを目指したと言えないであろうか。

「実用」に即した指導書とは、当代の禅僧として習得していることが望ましい詩作の製作法を示す書のことを意味する。当代の禅僧として習得していることが望ましい詩とは、日常茶飯事として要請される詩、次いで禅林において慣習化し、なかば儀礼化した詩、さらに権門や庇護者より要請されることの多い詩等である。

禅僧が日常茶飯の事として要請される詩については、常識として習熟していなければならない。『中華若木詩抄』の抄者も、この点に留意し、種々の角度より指摘している。

捻シテ塵ト云ノ一字題ガ大事也、(中略)此ノ詩ナントガ一字題ノ本也、

(上80「塵」詩項)

捻シテ二字題ハ題ノ字ヲ出サスシテ作ルガタシナミ也、出シテモ不苦也、出サジテワビシク作ルハ出シテユウ  
 〈トアルヨリハヲトリ也、(中略)此詩第四句ニ落葉ノ字ソノママ出サレタリ、時分ハイマダ上古ニテ絶句ノ詩  
 ナンドガウツクシクソロハヌ也、其上ヘ大才ノ人ナレハ子細アルヘシ、後輩ハ用捨可然乎、(下54「落葉」詩項)

一字題詩、二字題詩についての注意である。前者は、本朝の九鼎「塵」詩に対する注釈である。一字題の重要性と、九鼎詩がそのお手本であることを指摘する。後者は、本朝の義堂「落葉」詩に対する注釈である。義堂詩は、二字題であり、結句を「真ヶ梧桐落葉声」とする。題辭の「落葉」をそのまま詠み込むことに対する見解である。指導は懇切である。

是レハ句題也、句題ニハ最下ノ一字ヲ四ノ句ノ韻ニフムカ大法也、然レトモ此句ノ下ニハ仄声ノ字ニテ平声ノ字ナ  
 シ、平声ノ字ノ中ニテ最下ノ字ハ花ノ字也、故花ノ字ヲ勻ニフム也、コレモ句題ノ勻ノトリヤウノ手本ナルベシ、

(中61「遙見人家有花便入」詩項)

句題詩についての注意である。本朝の希世「遙見人家有花便入」詩の結句は「処々相過為有花」である。題辭は、抄者が指摘することく、白居易「尋春題諸家園林」詩に対する「又題一絶」詩の「遙見人家花便入、不論貴賤与親疎」句に拠る。佳句として知られ、『和漢朗詠集』にも採られている。句題詩の場合は、最下の一字を結句に押韻するの

が「大法」である。が、この句題の場合は、原典の詩において奇数句・転句であり、そもそも押韻された句ではなく、「入」字は仄声である。そこで、平声の字の中で最下に配される「花」字を韻字としたという指摘である。句題、特に白居易の佳句については、禅林ではそれほど受容、愛賞されていない。が、伝統的な作詩法だけに、注意を喚起する必要があるであろう。次のような指摘もある。

捻ノ一切ノ草木等ヲ賦スルニ其草木ニ作ルヘキコトナケレハ其草木ノ名ニヨリテ作也、コレモ又一法也、

(下9「金錢花」詩項)

草木等を賦する際の注意である。時代が降るにつれて、題辭や素材が細分化し、作者にとって未知の動植物でありながらも作詩しなくてはならない機会が多くなる。

捻シテ図ト題ニ出スニハ図ノコトヲツクラウトモ作ルマシキトモ其人ノハカライ也、図非図ト云テ図ニツクラヌカ法ナリ、然トモ又図ニ作ルコトモアリ、図ハ画ナリ、

(上74「応制富士山図」詩項)

画図題詩についての注意である。本朝の横川「応制富士山図」詩に対する注釈である。画図題詩の場合は、表面的にはむしろ画図のことに詠まないので「法」であるとする。画図を眼前にして着賛する場合、特に首肯される。ただし、厳密に守られなくてはならない作詩法ではなさそうである。『中華若木詩抄』の抄者が、最も喚起したのは、故事題詩に対する注意である。

故事題ハカヤウニ天下ノコトヘカケテシタタカニ作ル者也、風月花鳥ノ詩ノヤウニウツクシクハ作ラヌ也、サレトモウツクシクテモ細金ナルハヨキ乎、ヨハキガ悪キ也、サアルニヨリテ故事題ハ一キワノ大義也、ソレモ作り得タレバ又花鳥風月ヨリハ作りヨイト云コトモアリ、捻シテ極意ノ上ニテハ両方通用也、

(中71「東坡像」詩項)

故事題ヲハカヤウニ論ヲシタムカニタテム作ル者ソ、

(下77「揚雄」詩項)

(上略) 故事題ノ手本也、故事題ト云者ハ此詩ノヤウニ実ニシテシカモ氣象アリテ死却セヌガヨイ也、前後ノ故事

ヲ取リアワセテ批判シテ作クル也、

(下80「太公釣渭図」詩項)

故事題詩、すなわち歴史上著名な人物に対する賛詩や逸話・故事に対する賛詩を重要視していることが判明する。本朝の惟肖「東坡像」詩項では、特に花鳥風月を素材とした詩との差異を指摘し、故事題の詩がひととき「大義」であるとする。中華の謝枋得「揚雄」詩項や本朝の惟肖「太公釣渭図」詩項でも、故事題について力説している。これらを総合すると、故事題の詩は「シタムカニ」作ることであり、それは「前後ノ故事ヲ取リアワセテ批判シテ作ル」ことのようにある。賛すべき個人や逸話・故事に関して、できるだけ幅広く話題（逸話や故事）を求め、それを作者独自の価値観によって截断して作詩することを意味しよう。作家として、禪詩として、最も個性を発揮し得る作詩法と考えたのではあるまいか。従来の価値観に拘泥しない、禪詩を製するにふさわしい作詩法と考えたのであろう。

禅僧の唱和詩については、例外なく和韻詩であると言っても過言ではないであろう。和韻の法の中では、「次韻」が採用されるのがもっぱらである。

和勻ハ大事ノ者ゾ、新シク云イ出サ子バ曲ナイ也、此詩和勻ノ本ナルベシ、

(上28「和月舟佳丈韻」詩項)

和韻の法による唱和詩が製せられることが一般化すると、形式の上からの制限が強化され、作詩法が類型化する。右の例は、本朝の天隱の試筆唱和詩である「和月舟佳丈韻」詩に対する注釈である。試筆唱和詩は、形式的にも内容的にも類型化が進んでいる。それだけに、新味を出すのは難事であったと推される。

禅林では、慣習化し、なかば儀礼的に交される詩作がある。試筆唱和詩はそれであり、他に寄人詩、送人詩、悼詩等がある。これらにおいては、しばしば童蒙が話題の中心・素材となり、同時に、自身が詩作を製することを余儀なくされることもある。『中華若木詩抄』にも取りあげられている。

捻ゾイタミノ詩ハ作リニクイト云儀也、此ノ詩等ハ妙也、僧ガイタミノ詩ヲ作ルト云テ禅話ヲ入テサラリトサトリニ作レハイタミニテハナイ也、悼ノ詩ハイカニモ愚痴ニ立カヘリテ作ルベキガ本也、

(上23「哭微之」詩項)

此詩送行ノ詩ニ妙作也、幽微ニ作ラレタ也、南江ハカヤ〔ウ〕ノ詩カ上手也、

(中39「春城別意」詩項)

前者は、悼詩を製する際の注意である。中華の白居易「哭微之」詩を取りあげている。禪僧が僧の立場で法語めかして詩作することを戒め、むしろ俗の人情に即して詩作することが「本」であるという。俗の詩(白居易詩)を代表例に取りあげながら、禪僧詩人としての心得を説く点が特徴である。後者は、本朝の南江「春城別意」詩に対する注釈である。題辭を一見しただけでは、送行詩・送人詩であると判別できない。が、ふさわしい詩題を選定して詩を賦した上で、それを故人に贈って別意を表するのも送別法の一つであった。

権門や庇護者から詩作を要請されることがある。要請される時と場合が限定され、したがって詩作の内容も限定されるが、依頼者が権門や庇護者であるだけに、細心の注意を払わなければならない。

応制ニ恰好シタル詩也、妙也、

(中16「応制賦三山」詩項)

コレハ和歌ノ題也、

(中53「花埋苔」詩項)

前者は本朝の絶海「応制賦三山」詩、後者は本朝の天隱「花埋苔」詩に対する注釈から引用した。応制詩は、勅命に従つての作詩である。絶海詩の場合は、洪武九年(一三七八)の春、明の太祖高皇帝に英武楼に召見されての作詩であり、皇帝より唱和詩を賜わっている。絶海のみならず、禪林の名譽事として喧伝されている。和歌題詩は、和歌題による作詩であり、禪僧、禪林の依頼ではないことを示す。世俗からの依頼作品、あるいは和歌を得手とする俗の人々と同席しての作品であることを示す。『中華若木詩抄』には、右のほかにも、応制詩とそれに準ずる作品や和歌題詩が取りあげられている。次のような例もある。

和歌ノ題ニテ蘭坡応制ノ作也、

(上46「山中紅葉」詩項)

本朝の蘭坡「山中紅葉」詩が、応制詩であると同時に和歌題詩であることを指摘している。

以上、題辭や素材の面に注目して検討した。『中華若木詩抄』の編者は、童蒙の啓蒙書にふさわしいと思われる配

慮を払っている。その配慮とは、つまるところは「実用性の重視」ということになる。『中華若木詩抄』を編集した目的の一つは、実用的な指導書を作成することであつたと考える。

### Ⅲ 内容面における特徴——禅的発想の重視

『中華若木詩抄』の編者が取りあげる詩について、内容面からその特徴を探ってみたい。具体的には、発想と表現に注目して検討することになる。『中華若木詩抄』の注釈をみると、次のような評がある。

一二ノ句ヨリ三四ノ句マデスラリト一スデニ作ル妙ナリ、

(上4「秋夜聴雨」詩項)

アリ／＼ト作タ詩也、

(上51「新涼」詩項)

何ノテマモ入ラズ妙ニツクラレタゾ、

(中45「題画」詩項)

造作モナク作リタ也、妙也、種々マワイタ吟ナクシテソノマムニテ妙ナルソ、

(中58「山中与幽人对酌」詩項)

此詩ハ何ノヤウモナク江村ノ景ヲソノマム画カイタヤウニ作リタカ妙也、元来詩画一律トテ詩ト画トハ一ツ也、詩中ニ有画面中ニ有詩ト云フ、

(下37「江村」詩項)

編者・抄者が、それぞれの詩の「スラリト一スデニ」「アリ／＼ト」「何ノテマモ入ラズ」「造作モナク」作られていることに注目している。これらの詩が、眼前のあるがままの状況、状況を写していることを評価する。私意を抑え、一見無造作に、あるがままに写した詩である。伝統的文学（観）を基盤にした常識的な発想と、平易な表現によって作品化したものである。初心者である童蒙にとってはどうしても習得しなければならない作詩法、禅林、禅僧の詩（禅詩）の基本になる作詩法より成った詩である。理解、鑑賞が比較的类型的な詩であり、したがって抄者の注釈も簡潔である場合が多い。叙景の詩、画図の賛詩等が多い。右の評語の中では、特に「アリ／＼」に注目される。『中華若木詩抄』の抄者は、素直な発想と平易な表現から成る好ましい叙景詩であることを示す代表的な評語として「あ



りく」を用いる。「面白キ夏景也、アリくト作タソ」(中7「雨」詩項)、「聞笛処ノ即景ヲアリくト作ラレタ也」(中10「聞笛」詩項)、「吳江ノ晚景ヲアリくトノベテ(下略)」(中28「吳江」詩項)、「画中ノ景ヲ宛然トアリくシク云イ出タサレタル也」(下58「江天暮雪」詩項)等とある。なお、中華の遜觀「江村」詩項に引かれる、王維の詩画を評した「詩中有画、画中有詩」については、本朝の南江下74「画軸」詩項にも引かれている。このほか、『中華若木詩抄』の抄者は、

春昼ノ趣自然ニニコヘテ妙ナルソ、

(下53「春日作」詩項)

柳絮ノ体如レ在レ眼中也、

(下57「柳絮」詩項)

とする。いずれも叙景の詩で、景より得た素直な発想と平易な表現から成る好ましい詩として評価したものであろう。『中華若木詩抄』の編者は、素直な発想と平易な表現から成る詩を取りあげる。漢詩を習得しようとする者の避けることのできない発想、表現である。そして、文筆を志す禅僧は、さらにもう一つの面から要求される。それは宗教的な活動を基盤にした発想や表現である。禅僧が果たし得る、禅僧独得の発想、表現である。禅僧の詩が、特に禅詩として、一般の詩と区別されるところのものである。具体的に言えば、禅的发想と博引傍証の問題に絞られよう。このうち、博引傍証については、時代が降るにつれて徹底する。禅僧の知的水準は極度に高められ、觀念的世界は膨張する。一朝一夕に習得できるものではない。童蒙に対しては、その要求にも限度が存することになる。『中華若木詩抄』の抄者も、この点に留意しながら、それぞれの詩が依拠した逸話・故事や佳句を指摘している。本稿でも検討すべきであるが、紙幅の關係上、割愛した。一方、禅的发想については、多くは従来の価値観を一新、転換した内容になっているように思う。この価値の転換を内容とした禅的发想こそは、既成の觀念や価値観にとらわれない、ありのままの生を生きることを目指す禅僧にして能く保持し得るものではあるまいか。さらに、禅的发想は、自己の宗教的基盤・悟境より、自然発生的に作品中に示されるもので、个性的であるはずであるが、時代が降り作品数が多くなると、おおまかに類型を指摘することも可能であったのではあるまいか。『中華若木詩抄』の抄者は、類型化して示す

までの配慮はしていないが、禅的発想による作品を多く取りあげている。対象は言うまでもなく未悟の童蒙であるが、将来禅僧として禅詩を製する上で、早くより馴れておく必要があると考えたのではあるまいか。

『中華若木詩抄』の内容面における特徴の一つは、禅的な発想による作品が多く取りあげられていることである。例を示そう。

満会昌

滕玉宵

莫道文章不直錢、布衣親到玉皇前、好詩未足三千首、又為梅花入瘴烟、

上巻35に収められる中華の滕斌(元字は玉宵)の詩の眼目は後半部にある。前半部で、世人の「文章など一錢にも値しない」という言を否定した上で、布衣無官の身が親しく天子の御前に近侍し得たのは文章に長じたが故であるとする。その上で、今や会昌に流謫されることになったが、好詩はまだ三千首に足らず、幸いに南方の梅花を得てこれを充足すべく勇躍瘴霧の地に赴くことであるとするのが、後半部である。流謫のことは、実生活における俗事であり、非惨事である。特に当事者にとっては、感慨一入のものが存したであろう。自己の落胆、絶望の情をそのまま詩にすることも可能である。が、右の詩の場合は、落胆、絶望の情に沈むのではなく、むしろ積極的に受け入れている。『中華若木詩抄』の抄者は、

謫セララムハ誰モメイワクナコヲ詩ニモ作クルニ引カヘテ作ル也、豪氣可レ尚、

とする。「引カヘテ作」っている点を評価している。順風満帆時の生活を可とし、不遇落胆時の生活を不可とするのは、世俗の一般的な価値観である。が、禅僧、禅林においては、世俗の一般的な価値観にとらわれることなく、それらを転換し、一新したような作品が歓迎されたことを示している。

世俗の価値観の中で最大の関心事は、「栄」と「辱」に関わるものではあるまいか。さきの滕斌の詩は、実生活における流謫という俗事を素材にしなが、それを文学の世界における雅事に転じていた。流謫を素材にした詩として

は、次のような作品もある。

東坡戴笠図

江西

戴笠褰裳禿髮双、夢中不覺落蛮邦、牛欄西畔浪濛雨、醉眼玉堂雲霧窓、

中巻65に収められる本朝の江西の作品で、南方儋耳の地に流謫された蘇軾が不可思議な笠を着して彷徨する図への賛である。俗事、惨事を写した図への賛であるが、江西は、蘇軾がこの一事を夢中事として観じており、田舎と都を分別することはなく、したがって蛮村の雨も宮中の雨と同様に對しているとする。『中華若木詩抄』の抄者は、

サレトモ東坡ハ是亦一東坡、非亦一東坡ナレハ万事ヲ夢トミレハコムハ夷中コムハ京ト分別スルコトモナイゾ、カヤウノ艱難ヲ身ニヲボヘヌゾ、

牛欄西畔ノ雨カ即チ天上玉堂雲霧也、カヤウノ句法可着眼、

のような注釈を加えている。特に後者については、これこそ蘇軾が「儒者ノ知識トテ大明眼ノ者」(省略)であつたか  
ら可能であつたとする。江西詩では、夢中事と観ずることにより、転句の俗事も結句の雅事も平等、無差別であると  
する。抄者の「カヤウノ句法可着眼」の評は、価値の転換を図つた発想法に對する賛辞と解する。なお、右の江西詩  
については、「賛蘇軾笠履像作品について」(岡山大学教養部紀要・12号、昭51.3。拙著『禅林の文學・中国文學受容の模相』第三章第一節にも所収)において少しく検討した。この論考  
では、蘇軾の被物に関する話題である「子瞻様帽」と「蘇軾戴笠像」を取りあげ、禅林においては、都における榮譽  
風流を象徵する「子瞻様帽」よりも、流謫、俗事を象徵する「蘇軾戴笠像」の方に興味と関心が寄せられていること  
を指摘した(禅僧は、蘇軾の戴笠像に對し、夢中事と観すること、天恩や君恩と観すること、さらに、蘇軾の心情を推し測ること、海外四州のために評価すること、題俗の姿態と観すること、笠履を天地に比し笠簪底が九州四海であると観すること等によって、価値を転換し、作品化していた)。

『中華若木詩抄』には、次のような作品をも取りあげている。

乞米

黄君度

恨不移封飯顆山、却来写帖学陶顔、首陽豈是无薇蕨、懶把清名落世間、

## 松

## 李誠之

半依巖岫倚雲端、獨立亭々冒歲寒、一事頗為清節累、秦時曾作大夫官、

前者、中華の黃君度の「乞米」詩は、中巻3に収められ、貧のあまり米を人に乞うた詩である。「李白飯潁山頭逢杜甫」の逸話や陶淵明と顏真卿の逸話を詠出するが、一詩の眼目は後半部にあろう。伯夷と叔斉の首陽山の薇蕨（ぜんまいとわらび）を食んで餓死した故事も熟知しているが、それを実行することによって清名が世間に聞こえることをむしろ嫌悪して、不本意ながらも米を乞うことであるとする。諧謔の氣味が濃い作品であるが、抄者も、

（上略）我カ心ニハ伯夷叔斉カ清名ノキコヘタサヘ見タウモナイコト也、隠者ハ人間ヘハ足ブミラセズ名モ聞ヘヌガ本ソ、清名ノ世間ヘキコエタハ至極人間ノ塵ニケガサレタモノ我ハイヤゾ、サヤウニ名聞ガマシクアランズルナラバ一向世間ヘ出テ人ノ御ヒゲノ塵ヲハラウテコソ居ルベケレ、清名ノキコユルモ惡名ノキコユルモ名聞ハ同シコトソ、

として、「清名」をも否定している。後者、中華の李師中（宋・字は誠之）の「松」詩は、中巻54に収められ、松に対する賛詩である。歲寒の操を詠出するが、一詩の眼目は後半部にあろう。この松の清節を賛する上で煩いとなる一事があり、それこそ秦の始皇帝の雨宿りによって得た五大夫の官であるとする。抄者も、

サレトモコノ松ニ不足ナルコトガ一ツアルソ、コレガ松ノ清キ節儀ノワヅライトナルソ、（中略）松ノ清節万木ニスグレタレドモ無道第一ナル始皇ノ封ヲ受タル事ガキズニテアルソ、

として、松の清節に汚点を印すのが五大夫の官であるとする。黃君度の詩といい、李師中の詩といい、世俗の一般的な価値観に照らした場合は榮譽事として称賛される采薇の逸話と五大夫の松の逸話を、むしろ恥辱事としている点に特徴がある。「価値の転換」を考へる場合、世俗における一般的な価値観において否定されていることを肯定に転換するのが大半であるが、逆の場合も存することに注意しなければならない。肯定の価値観は、定着し易く、転換し難

いものである。しかも、肯定の価値観を転換することは、該当者（物）にとっては好ましいことではない。諧謔、諷刺、皮肉等、特別の意味内容を意図した作品が多くなるのも、このためである。

世俗の一般的な価値観を転換するような発想、表現より成る例として、「栄」と「辱」に関わる話題を素材にした作品を紹介した。俗の価値観・相対的な価値観の中で、世人の最大の関心事は、栄と辱に関わるものであると考えたからである。

文人、文筆僧においては、様相を異にする。文人、文筆僧にとっての関心事は、文学の世界における価値観である。そこで、文学の世界での価値の転換とは、しばしば伝統的、一般的に定着しているものとして信じて疑わない文学上の観念、価値観に対して、敢然として立ち向かうことを意味する。禅僧の脳裏に定着する文学上の観念、価値観は、主として著名先人の逸話・故事や佳句によって構成されている。定着している観念や価値観を、言葉の上で否定して作品化することは容易であろうが、内容的、論理的に読者を説得することは難事である。ある意味では、文学的伝統を破壊することにつながるからである。保守的な体質の漢詩人、漢詩壇からは、破壊者として、非常識の詩人として無視されることにもなりかねないであろう。幸か不幸か、禅林の文学は独自の展開を示し、旧来の貴族を中心とした漢詩人、漢詩壇との衝突、摩擦は認められないが、それにしても十二分に留意しなければならない点である。この点からは、まず価値の転換が認められる中華の詩人の作品を受容、喧伝することが、それら転換された観念、価値観を定着、普及させる上で、最も簡便で堅実な方法であったように思う。『中華若木詩抄』には次のような作品がある。

飲湖上初晴後雨

蘇東坡

水光激激晴方好、山色空濛雨亦奇、欲把西湖比西子、淡粧濃抹總相宜、

この人口に膾炙した蘇軾の詩の眼目は、抄者が「西湖ヲ西子ニ比スルモ此詩ヨリ始ル也、雨奇晴好ト云モ此詩ヨリ作タルソ」とするように、西湖を西施に比したことから、「晴好雨奇」の景を佳としたことである。「晴好雨奇」について

は、「晴好」のみならず「雨奇」に着目した点が新味である。価値の転換であり、これこそが、この「飲湖上初晴後雨」詩が禪林で愛賞され、わざわざ『中華若木詩抄』に取りあげられた因由であると考ええる（岡山大学教養部紀要・13号／昭和52（1977）の蘇公堤「西湖詩」について参照。本論考は後に拙著『禪林の文学——中国文学受容の様相』第三章第二節に所収した）。

## 梅花

王蕭猗

不受緇塵半点侵、竹籬茅舍自甘心、只因誤識林和靖、惹得詩人說到今、

## 秋胡子

趙子昂

相逢桑下說黃金、料得秋胡用計深、不是別來渾不識、黃金聊試別來心、

## 揚雄

謝疊山

寂寞清高一老儒、平生自許聖人徒、太玄真是擬周易、豈不前知莽大夫、

王蕭猗の「梅花」詩は、下巻29に収められ、西湖処士と称せられ梅を愛した林逋（宋・字は君復、諡は和靖先生）を詠出する。一詩の眼目は、抄者が

常ニハ林和靖ニヨリテ梅モ芳キヲ添タナントム作ルニ一段カワリテ和靖ニ識ラレテヨリ汚ルムト云フ心ニ作リタルカ妙也、

とするように、後半部にある。誤って林逋に識られたことにより、詩人が梅の詩を争い作ることになり、かえって汚れたことであるとする。本朝禪僧の觀念裡には、特に梅花―林和靖―「疎影横斜水清浅、暗香浮动月黄昏」佳句として定着している。このいわば文学上における常識に対して、挑戦している。そして、王蕭猗の詩は禪僧に、梅に限らず、詩の代表的素材とそれに関わる逸話・故事、佳句が「同様に発想すれば価値を転換することができる」という、模範を示しているように思う。趙孟頫（元・字は子昂）の「秋胡子」詩は、下巻59に収められ、秋胡（魯・春秋）とその妻の逸話を詠出する。妻を迎えて五日にして陳に赴いた秋胡は、五年後に魯に帰り、路傍において採桑の美婦を見、これに黄金を与えて迫る

が、逃げ去られる。ところが、家に至って先の婦人が妻であったことを知るのである。その妻は夫・秋胡を責め、河に身を投じて死んでしまう。趙孟頫の詩の眼目は、この不義・不実の秋胡を弁護する点にある。故意に桑下において黄金で迫ったのは秋胡の深い企みであり、別れて以来の妻の貞節の心を黄金によって試したものであるとする。抄者は、(上略) タマ／＼コムニテ逢タルカ幸ノコトナルホトニ妻力心ヲシラント思テ黄金ヲ以テアヤツルソ、深キタクミソ、以前ノ詩ニ引カヘテ妙ナルソ、

としている。「以前ノ詩」とあるのは、上巻47に入る銭菊友の「秋胡子」詩を指す。「郎恩葉薄妾氷清、郎説黄金妾不膺、若使偶然通一笑、半生誰信守孤灯」とし、秋胡の薄情に対してその妻の清節・貞節を称揚する。抄者は、文学の世界で定着している觀念、価値觀に基づく銭菊友の詩よりも、趙孟頫の詩を高く評価している。読者・童蒙は、二詩を比較することにより、その歴然とした差異を学ぶ。そして、確固として揺らぎそうにない文学上の觀念、価値觀すら、揺るがし得ることを知るのである。謝枋得(宋。字は君直、号は盤山)の「揚雄」詩は、下巻77に収められ、漢の揚雄を賛した詩である。揚雄は文人、思想家として名高いが、一詩の眼目は後半部に存する。揚雄の著書である『太玄経』は『周易』に擬して作られたことで知られるが、もしそれが真であるなら、後世王莽に仕えたために「莽ノ大夫」と記される恥辱を予め知っていたはずであるとする。抄者は、

面白キ論説也、揚雄ハ名人ナレトモ王莽ト云ヘルイタツラ者ニ引カレテ千古万古マテモ名カ汚レタルソ、莽カ大夫ト通鑑ニ記シタルハ太罪シテシルシタル也、

とする。「通鑑」については、第一、二句の注釈の項で「通鑑綱目第八云、莽カ大夫揚雄死」としている。謝枋得の賛詩では、揚雄や『太玄経』の名を否定することによって結ばれる。著名人に対する賛詩については、一般には称揚するのが礼儀であり、作法であると心得ていた読者、童蒙にとっては、自己の賛詩觀の転換をも迫られる内容ではなかったか。以上、王蕭綺、趙孟頫、謝枋得の詩については、いずれも文学の世界における常識を覆す内容を含んで

いる。価値の転換を内容にする発想から成る詩であり、読者、童蒙にとっては、自己の観念裡に形成した観念や価値観を再吟味し、新たに修正あるいは添加するにふさわしい内容を含む。

中華の詩人のみならず、本朝の禪僧の作品中にも、文学の世界における伝統的、一般的な常識を越えた発想により詩を製しようとする試みが認められる。『中華若木詩抄』の編者は、それらをも取りあげている。

#### 寄故人

#### 岱仰之

風月多情天一方、征鴻滅処暮天長、説情比髪々都短、只是三千余丈霜、

#### 寄越人

#### 江西

賀監湖辺燕子天、蘭舟蕩漾柳如烟、青春不再樂唯可、頭白書林未必賢、

仰之の作品は、中巻55に収められ、遠方の地に在る故人に寄せた詩である。一詩の眼目は後半部に存する。我が君を懐う情を説示して髪に比べれば髪の方がよほど短く、君なき愁いの髪はただあの李白よろしく三千余丈の白髪にしか過ぎないとする。結句は、李白「秋浦歌」(其十)詩の「白髪三千丈、緣愁似箇長」句に拠った表現である。その三千丈の愁髪が、我が情に比すればむしろ短いとする。李白の詩句を全面的に否定しているわけではないが、長いことを強調した「白髪三千丈」を、むしろ短い意に転じている。抄者は、

短キ髪ヲヨリテ長キト云イナシテ又其長キモ愁ニ比スレハ短キソト重々ニ云イ出タシテ心ハ未シテ妙ナル作意也、と評価している。本朝の禪僧は、李白に対しては佳句をそのまま取りあげることさえも躊躇したようであり、ましてや異議や異論を唱えるために利用するについては、かなりの決断を要したことであろう。江西の作品も、中巻75に収められる寄人詩である。抄者によると、越前国に在る友竹節侍者に寄せられた詩である。一詩の眼目は後半部で、今年の春が再び訪れることはないものであるからひたすら遊樂するのが可であり、いくら勉学に励んだとて私こそがよい例で、書物の林の中で白頭を迎えるほどになってもいまだ誰かが賢人とは認めてくれないのだからとする。童蒙に寄



せた詩である。「学ぶよりは遊べ」という内容は異色である。抄者も、

叢林ヨリ只今諸老ノ詩作りテ申サルヘキヤウ推量申スニ只今御里ニ御座アリテ御遊楽無用カ早々御帰リアリテ学問ヲメサレイトアルベシ、ソレモ余義モナケルトモ私ノ心中ハサウハナイソ、(下略)

とする。江西の詩は、寄人詩、特に童蒙に寄せる詩の常識を破っている点で新味である。諸老の詩が速やかな上洛と勉学を促す中であって、江西の詩は異彩を放っていたと推される。ただし、本心より遊楽を勧めているわけではなく、この点は抄者も、

捻シテ此詩ハ吾身ヲ卑下シテシカモサスリテツメルヤウナル詩ソ、ソコハ全体早々帰テ学問ヲセヨト云フ心アルソ、としている。早速の上洛と勉学を逆説的に促したものである。一般的な価値観を故意に無視、破壊することにより、改めてその価値観の意味を認識させることができる。江西の詩の意図したところである。以上、本朝の禅僧の寄人詩の中に例を求めた。文学の世界における観念や価値観を転換しようとする意欲が認められる。ただし、中華の詩人の作品例に比べてはるかに穏やかであるのは、本場の文学世界における歴史、伝統の重さを熟知していたからであろう。異国人が軽々に論評することは慎むべきであると考えたのであろう。

禅語に「風流ならざる処また風流」がある。風流ならざる処に風流を見出し得るのが、禅僧であると言われる。眼前に存在するものが風流ならざるものであっても、その中に風流を感取し得るのである。言うまでもなく、禅僧の実生活においては、観念的ではなく、自然にそれが実践されなければならないのである。相対的な価値観にとらわれることのない禅僧、禅宗にとっては、それが当然のことと考えられるのであろう。この考え方は、当然のことながら文学、作品の世界にも反映される。結果的には、伝統的、一般的な観念や価値観では理解し難い内容になり易い。読者にとっては、新鮮ではあったが、論理や実証を無視したものについては、難解でもあったと推される。なお、この思考法と実践は禅僧独得のもののように説いてきた。が、文学作品について言えば、中華の詩人の作品の中にも認め

られることがある。『中華若木詩抄』の編者は、それらも紹介する。中華の詩人の作品にすでに禅的な発想が認められることを示すことになり、「詩禅一致」を実証することにもなる。

### 荷花

陸務観

南浦清秋露冷時、凋紅片々已堪悲、若教具眼高人看、風折霜枯似更奇、

### 梅

陸務観

一花兩花春信回、南枝北枝風日催、爛熳却愁零落尽、丁寧且莫十分開、

ともに中華の陸游（宋・字は務観、号は放翁ほか）の作品である。前者は、上巻81に収められ、荷花に対する賛詩である。一詩の眼目は後半部である。もし具眼の高尚人の看賞に供したならば、風に折れ霜に枯れた無残の姿態もかえって奇絶の景に似るとすることであろうとする。具眼者・悟得者において可能であるとする。抄者は、

此景モ世上ノ至ラヌ者ノ上デコソ荷花ノ零落ニ感シテカナシムベケレ、大明眼ヲ具シタランズル高一看ナル人ニ見セタラハ風ニ折霜ニ枯タル体モ却テ面白カルベキ也、コムガ時節因縁也、

と注釈する。陸游自身にその看賞が可能であったか否かは判じ難いが、少なくとも凋落の景に奇絶を見出す法、風流ならざる処に風流を見出す法の存在を知り、実践に努力していた姿勢を認めることができる。「世上」の人の陸游であるから、文字通りに仮定事に解しても足りる。が、禅僧の読者にとっては、悟りの深淺がそのまま理解の深淺をもたらしただけであろう。童蒙にとっては、心構えとして肝に銘ずることはできるが、真の理解の難しい作品であろう。後者は、中巻22に収められ、梅に対する賛詩である。陸游は梅を愛賞した詩人として知られる。一詩の眼目は、十分に満開してはならないと強調する後半部に存する。抄者は、

梅花カマイテ十分ニ開クヘカラス、十分ナレハ零落ノ愁カアルソ、イツマテモ十分ナラスハヨカラウスルソ、と要約している。満開を望まない理由として、陸游はその後の零落の愁いをあげている。変化相の中に梅花を置いて

おり、無常觀を根底にした鑑賞法と言えよう。そして、この鑑賞法は禅僧の風流ならざる処にも風流を認めようとする主張の一つの実践とも解される。参禅して間もない童蒙にとっては、陸游の後半部こそは、クライマックスを最上の風流とせず、風流ならざる処にそれを認めようとする理由の一端が説明されていると解したことであろう。

### 隠者

陳一斎

洗耳人間事不聞、青松為友鹿為群、莫言隠者無功業、早晚山中管白雲、

中巻38に収められる陳一斎の「隠者」詩を添える。一詩の眼目は後半部に存する。隠者を賛するにあたり、隠者には働きが無いと責めてはならない、早朝より晩景にいたるまで白雲を管理しているではないかとする。世人にとって無為に日を過ごしているとみられる隠者に対し、白雲を管理するという功業を見い出している。風流の発見である。ただし、それは抄者が「功業ヲ云テ功業ノナキヲアラハス妙也、雲ヨリ外ハ事業ナイトキコヘタ也、静中ノ動ソ」とするように、世俗の観点からは、結局のところ功業が無いことを表明したことであり、いよいよ複雑である。重層的な発想、表現と言えよう。文学、風流の観点からは無より有を生じたわけであるが、世俗の観点からはやはり無に帰するわけである。

本朝の禅僧の作品中からは、惟肖と希世の作品を紹介する。

### 秋日聴鶯

惟肖

疎柳無烟曉日明、秋來猶自着啼鶯、不知老去歌声短、恰似春前啼未成、

### 無画扇

惟肖

楮裁便面勝霜雪、不使丹青着墨間、我自胸中多筆意、趙昌花草郭熙山、

惟肖の二詩である。前者は、中巻57に収められ、秋日の鶯声を詠出している。一詩の眼目は後半部にある。老いのためにその歌声が短くなったことを忘れて、あたかも春より前いまだ一人前の声でない初音の囀りのごとく聞いたこと

であるとする。抄者は「立カヘリ却テ初音ノヤウニ聴ナサレタル作意也」と評している。歌声が短くなりいささか風流を欠く老声を、発想の転換により未成熟の声として、初音のように聴く点が新味である。後者は、下巻28に収められ、無画の白扇に対する賛詩である。一詩の眼目は後半部にあり、抄者は、

丹青ヲ着ケヌモ又可也、我胸中ニハ種々サマ／＼ノ絵様ガアルソ、（中略）我カ胸中ニハ趙昌カ花モ郭熙カ山モノ  
ノマムニテアレハ画テ無用ソ、

とする。画図を欠いた白扇ではいかにも無風流であり、賛詩することも難事であると考えがちであるが、胸中に「筆意」・画意さえ存すれば、むしろそれを自在に描くことが可能であり、風流そのものであるとの発想である。無より有を生ずる発想として典型的である。

#### 謝官客見過村居

村菴

山籬莫掃白雲深、門徑休鋤綠蘚侵、却是村居自然趣、風流稱得貴人心、

#### 画猿

希世

鉄石心肝画得成、依稀三峽月明情、愁人相見斷腸尽、縱是無声還有声、

#### 白牡丹

村菴

堂後新開冰玉姿、却疑夜雨洗胭脂、豪家爭買紅兼紫、一種風流人不知、

希世の三詩である。「謝官客見過村居」詩は、中巻4に収められ、貴人の來訪を謝した詩である。後半部について、抄者は、

（上略）山中ソノマムノ風景ヲ却テ風流ニ思食ホトニソレニヨリテ馳走シテ掃地ヲモイタサヌ、更ニ怠慢ノ儀ニテハナイト謝シ申スコムロナリ、

とする。白雲を掃い緑蘚を鋤しないのは、あるがままの村居野趣の中にかえって都には存在しない別種の風流が見出

されて御意に適うのではないかとする発想である。読者、童蒙にとつては弁解がましく聞こえるかもしれないが、それでは凡俗の人の理解なのである。希世の詩は、禪僧が可とする風流のあり方、風流への対し方をも示したものである。「画猿」詩は、中巻37に収められ、猿を描いた図への賛詩である。一詩の眼目は後半部にある。何となき人できえ哀れであるのに、まして愁いに沈む人がこれを見たならば断腸し尽くし、たとえ図中に声は無くともかえって声があるのと同じことであるとする。抄者は、

画猿ニ声カナイト云ヘトモ声アルト同シコト也、声アルモ断<sup>レ</sup>人腸、無<sup>レ</sup>声モ断<sup>レ</sup>人腸、ホトニ画猿ト真猿トノ隔テハナイツ、妙ナル詩也、

としている。無声の猿図であるが、図の迫真により愁人は断腸の思いに沈み、結果的には三峡の断腸の猿声があったのと同じだとする。愁人が断腸の思いに沈むのは迫真の猿図を眼前にして共感したためであるが、その共感はとりもなおさず三峡の断腸の猿声を聞くことができたために得られたものである。視覚の世界である画図中に音声を取取しようとする鑑賞法は、それほど目新しいものではない。希世の詩の発想法もこれを倣ったにすぎないとも考えられるが、「無声」を印象付けた上で「有声」であるとするもので、単に「音声を取取される」とか「音声を聴取しなさい」と言うのではない。「白牡丹」詩は、下巻24に収められ、白色の牡丹花に対する賛詩である。一詩の眼目は後半部にある。豪家・官家においては、紅や紫の牡丹を争い買うばかりで、白牡丹が具備する一種格別の風流については気付いていないとする。抄者は、

(上略) コノ白牡丹ハ一種別段ノ風流ナト云フハイマタ官家ニ知ラヌ也、コムガ一段ノ賞翫ナリ、紅紫ノヤウニ人カ争テハ曲ナイツ、人ノ不知処カ妙也、

とする。文学世界の風流を形成し、時世の風流を左右した豪家・官家の価値観に対し、全面的に否定、反抗したわけではないが、挑戦を試みている。「人ノ不知処カ妙也」とあるが、視点・観点を変えることにより、従来顧みられる

ことがなかったものに新たな価値を添えようとした点が新味である。

『中華若木詩抄』に取りあげられる作品の中で、平素は看過されがちである対象の中に価値を見出しているような作品を紹介した。いわば「風流ならざる処」に風流を見出したような作品であり、一般的、伝統的な觀念や価値観を転換し、時には新たに添加する内容になっている。このような作品は、やはり「価値の転換」を意図する発想によって成った詩として考えられる。「風流ならざる処また風流」の禪語に象徴されるように、この発想こそは、禪僧に容易に理解され、また実践されたものと解される。童蒙にとっては、早急に馴れ親しみ、やがて自在に実践することができるようにならなければならない発想法であった。

禪語に「須弥芥子に入る」がある。極大の須弥山を極小の芥子の中に入れるの意で、大と小といった相対的な見方を超越した融通無碍の大悟の境界を表現したものらしい。このいわば「須弥芥子に入る」にも類した、融通無碍の発想から成る詩が認められる。俗人にとっては理解し難いものであるが、いかにも禅味を滲びた作品であると感心することもある。理性的には否定せざるを得ないが、感覚的には首肯し得ることもある。このような詩における発想と表現を、やはり「価値の転換」を意図した発想と表現として考えたい。作者が禅僧の場合、宗教的基盤・悟境をもっとも端的に示している詩と考える。『中華若木詩抄』より、若干の作品を紹介する。

### 謁諸葛草廬

劉清叔

泉声猶帶嘯時寒、曾有人龍此地蟠、未必鼎分天下后、乾坤得似草廬寬、

中華の詩人である劉并（宋・字は清叔）の作品である。下巻61に収められ、諸葛孔明の旧廬を訪れた折の感慨を詠作している。

一詩の眼目は後半部に存し、劉備のために尽力して天下を三分して蜀の地を得た孔明であるが、いまだその天地はかつてその裡にあって自在に謀を運した草廬の広大さには似るべくもないとする。抄者は、

諸葛カ心ニハ草廬ヲ一天下ト思ヒ一天下ヲ草廬ト思ヒタル也、（中略）然ル間草廬ニイタトキハ天下寛シト思タル

カ草廬ヲ出テ天下ヲ三ツニ鼎分シテハ一日モ安キ心ナクシテ天下ヲ事外セハク思フ、劉備ノ天下ハ草廬ノ寛カリシヤウニモナイソ、乾坤ハ天下ト云心也、一転シテ妙ナル詩也、

とある。劉并の場合、おそらくは孔明が一天下の動静を掌握しながら隠棲していたことに注目し、草庵の裡には天下が存在したのと同じであると考えたのであろう。三分された天下では比べようもないというのである。劉并の禪的素養については不明であるが、詩の発想は禪的発想に通ずるものである。

## 李白看瀑圖

横川

三千尺瀑雪飄空、李白題詩立晚風、若変銀河成斗酒、廬山渾可在胸中、

## 李白騎鯨圖

球書記

泥視君王爛醉中、錦袍色映牡丹紅、開元天下一盃水、去跨鯨魚汗漫風、

## 陳寛

天隱

山房引水遠連筒、雪後涓々疑不通、冰底今無疏鑿手、禹功未到一竿中、

本朝の禪僧の作品である。横川の詩は、中巻31に収められ、李白の看瀑の図に対する賛詩である。李白「望廬山瀑布」(第二首)詩の「飛流直下三千尺、疑是銀河落九天」句や杜甫「飲中八仙歌」詩の「李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠」句にも拠っている。横川詩の眼目は後半部である。抄者は、

李白ハ又一斗百篇トテ酒一斗ノミテ詩百篇作ルソ、若此銀河ヲ一斗ノ酒トナシタラハ李白一口ニ汲尽スヘシ、然ラハ廬山ノ瀑布ハ李白カ胸中ニアルヘキソ、快ニツクラレタソ、コレモ唐人ノ古詩ニ胸中ニ有廬山ト云タホトニソレヨリ心ヲ設ケタソ、

と注釈している。銀河を斗酒に変ずれば李白の汲尽するところとなり、廬山の瀑布はすっかり李白の胸中に収められることができる。が、もし廬山の銀河を斗酒に変ずれば、李白のたちまち飲み干して詩百篇を製するところと

なり、廬山が余すところなく李白の胸中に在ったことが知られるにちがいないの意に解する方が妥当ではあるまいか。理屈に過ぎ、中華の詩人に類似の表現が認められながら、それでも「快ニツクラレタソ」と評価するのは、胸中に廬山在りとする発想が禅者の発想として共感を呼んだためであろう。球書記の詩は、中巻73に収められ、李白が鯨に騎して去る図への賛詩である。「李白騎鯨」のことは、そもそも「仙」の要素の濃い逸話であり、常識では理解し難い逸話である。球書記の詩の眼目は後半部に存する。抄者は、

大唐ノ一天下ヲハ一盃ノ水ホトニ思ソ、コノヤウナ天下ニハスマレテコソ、渺々タル大洋海ヘ入テ鯨魚ニノリテ汗漫ト九垓ノ上ニ期シテ虚空ヲ列子ナンドカ如ク飛行自在ナライデハ曲ナイソ、汗漫風ハ虚空ノ風ノ心也、

とする。開元の大唐天下をも一盃の水ほどにしが見做さず、これを見捨てて鯨魚に跨り広々とした虚空の風に乗じて自在に飛行する李白である。編者・抄者は、開元の大なる天下を小なる一盃の水に比した発想、さらには鯨に跨り虚空を飛行しているとした画図の舞台設定に共感を覚えたために取りあげたのであろう。天隱の詩は、中巻41に収められ、凍りついた筧を詠じている。一詩の眼目は後半部であり、今や凍りついた筧の水をきり開いて水を通わすための妙手を欠き、天下の洪水を治めた禹の功績もいまだわずか一竿の中に及んでいないということであるとする。抄者は、夏ノ禹ハ九年ノ洪水ヲ治メテ天下ノ大功ヲナサレタソ、天下ヲ九ツニ分テ其中ニ縦横ニミゾヲホリテ水ヲ平ケテ田地ヲ開也、天下水通セスト云処モナキノ、小キナル中ヘ大ナル故事ヲ用テ妙ナル詩也、と評している。わずか一竿の話題に大天下の故事を詠出する点を評価している。悪くすれば真実味を欠く戯れの詩とも解されるが、作者・禅僧にとっては禅味を発揮した発想、表現として得意であったのではあるまいか。

『中華若木詩抄』に取りあげられる作品の中で、世の常識を越えた融通無碍の発想より成る作品を紹介した。いわゆる「須弥芥子に入る」にも類した発想の看取される作品である。悟境を得た禅僧にとっては、観念的にはなく、自然に発想、表現されるものであろう。世俗の読者や童蒙にとっては、不馴れな、理解し難い発想、表現である。た



だし、それだけに禅僧、禅詩らしい発想、表現として新鮮にも感じ、積極的に評価もしていたようである。童蒙にとつては、悟境を伴わなければ無意味の発想、表現と考えられるだけに、今すぐの必要はないが、やがて禅僧、文筆僧として認められるために、どうしても習熟しておかなければならない発想、表現であった。

以上、本項では、『中華若木詩抄』に収められる詩を、内容面から検討した。作詩の基本とも言うべき、素直な発想と平易な表現からなる詩も取りあげている。が、それにもまして特徴的なのは、伝統的、一般的な観念や価値観の転換が看取されるような作品を多く取りあげていることである。いわゆる「価値の転換」を内容とした発想より成る詩である。この「価値の転換」を内容とする発想は、相対的な価値観にとらわれない自在の物の見方や考え方、さらに生き方を志向する禅僧にとっては、容易で我が意を得た発想であったと考える。『中華若木詩抄』の編者・抄者は、そのことを勘案し、特に主たる読者、利用者である童蒙に対し、かならず習熟して将来実践すべき発想法と考え、積極的に取りあげたのではあるまいか。童蒙が禅僧、文筆僧として大成することを期しての選択であり、老婆親切心からなる選択である。『中華若木詩抄』の編者の編纂意図が如実に示されていると考える。